作品に劣らず 光放つ草稿

賢治賞 杉浦静・大妻女子大名誉教授

北東北の詩人・宮沢賢治が、詩集「春と修羅」や童話集「注文の多い料理店」を刊行してから今年で100年。賢治は作品を何度も書き直す「推敲（すいこう）の作家」だ。その推敲の魅力を「すべての草稿に目を通した研究者」として知られ、今年、宮沢賢治賞を受賞した大妻女子大の杉浦静・名誉教授（72）に聞いた。

賢治を語る

小岩井農場から見上げる岩手山

「新校本宮沢賢治全集」（筑摩書房）では編纂（へんさん）委員も務めました。賢治研究との出会いは？

東京教育大（現・筑波大）で日本文学を専攻し、卒論について考えていた頃、賢治の校本全集が出ました。後半に推敲の過程を示す文章が掲載され、作品の変容のようすを知ることができた。童話でも詩でも、最初に書かれた内容が、推敲によってどんどん変わっていく。作品が移り変わっていく、その「過程」の面白さから研究を始めました。

杉浦静さん

「全草稿に目を通した」と言われます。

最初の頃は、賢治草稿のマイクロフィルムを見るために年に4、5回、宮沢賢治記念館（花巻市）に通いました。事務室にこもってずっとマイクロフィルムを見続けている。ちょっと風変わりな研究者でした。

推敲の魅力とは？

「春と修羅」の中に「小岩井農場」という長い詩があります。最初は、1922年5月21日に小岩井に行き、歩きながら手帳にスケッチしたものを帰宅後に書き直している。それを約1年後に清書したものがあり、さらに数カ月後、詩集を出すために改稿しています。いずれも内容が違うのです。

最初の原稿には独りで寂しいみたいな記述が出てくる。でも、それがだんだんと寂しくてもいいんだ、乗り越えていかなきゃいけないんだ、と変わっていく。

当時、寂しさを感じていたのは、花巻農学校の職場で人間関係がうまくいかなかったから。何の経験も持たずに教員になり、どうしていいのか、どう生きていくべきか悩みながら歩いている。

一方、賢治には信仰があり、寂しさの中で、信仰に基づく幻想を見ます。自分の歩いている後ろを、天の子どもたちがにぎやかについてくる。すごく楽しい気持ちになるわけです。でも、後の稿になると、これは幻想だ、人間が壊れた時に見えるものだ、と否定する形になっていく。

それが詩集では、ではどう生きるべきか、と考えが進んでいき、最終的には、自分と人と万象とが一緒に本当の幸せを求めていく、というふうに移り変わっていく。

賢治賞の受賞。研究者として思うことは？

賢治は推敲の過程だけじゃなく、草稿そのものも面白いんです。きれいな原稿もありますが、余白部分が全部書き換えの文字で埋まっている原稿もあり、それが不思議な深まりを示してくれる。

「銀河鉄道の夜」は四つの草稿が存在しますが、いずれも同じ原稿用紙の上で書き直しがなされています。一つの原稿用紙にいくつもの層が形成されていて、それぞれの物語が積み重なるようにして存在している。

賢治作品の多くは生前は未発表です。彼が生きていれば、さらに推敲されて違った形の作品になった可能性があります。

全集の編集にも携わりましたが、若い研究者には全集を絶対視せず、なるべく草稿を見て新たな疑問や可能性に踏み込んでいってほしい。

そのためにも、記念館には全草稿をデジタル化し、国内外の研究者がアクセスができるよう公開してほしいです。賢治の草稿はとても表情が豊かで奥行きがありますし、それ自体が作品に劣らず、強烈な光を放っているからです。（三浦英之）